

# 思想家の運動論

大塚三雄

## 1. 医学者の運動論

秀れた思想家というものは、過去とその時代の諸問題を鋭くとらえ、それを次の時代の課題として、適切に示した人々であるといえよう。

だからその思想は時代の人々の要求の反映でもあり、次の時代の歴史的現実には強い影響を与えるものでもある。

このように考えた場合、体育論・運動論をのべた思想家の山脈として、医学者では、多くの医学者の中からイタリアのメルクリアルス、18世紀イギリスのフラー、フランスのチッソ、ドイツのフランクをまずあげなければならない。

メルクリアルスは1569年、古代の体育を現代によみがえらせようとして、次のように題した体育書を出版した。

「古代において尊重されたが、今日知られていない体育に関する6冊の書物。すべての古代の運動の種類、施設、形式、作用……を含み、医者だけでなく、古代の知識と健康の維持に努力するすべての人に非常に有益な書物。」

フラーは1705年、「医学的運動論」を、チッソは1780年、「薬用的・外科的運動論」を出版し、ともに運動のもつ医学的効果を強調した。

さらにフランクは有名な大著「医学政策大系」を書き、国民教育の立場から、運動を国家的制度にまでしなければならなかった。

これらの医学者の主張は、当時の人々の啓蒙に役立つと同時に、近代体育の理論的背景となったのであった。

## 2. 教育者の運動論

他方、多くの教育者の中から、特にイタリアの人文主義者フェルトレ (Vittorino Ramboidini da Feitre 1398-1466)、チェコスロバキアのコメニウス (Jonann Amos Comenius 1592-1670)、イギリスのロック (John Locke 1632-1704)、フランスのルソー (Jean Jacques Rousseau 1712-1778) を、体育の推進者として見落すわけにはいかない。

フェルトレは、有名なゴンザガ侯 (Gian Francesco VI Gonzaga) の宮延に学校を開き、貴族と秀れた市民の子弟に、多面的な学科と共に、乗馬、レスリング、剣術、射撃、走、跳、水泳

などの運動を、人間形成の見地から実施し、近代体育への一つの道を示した。

これに対して、あらゆる民衆のための教育を論じ、大衆のための体育を説いたコメニウスは、近代体育に対して他の方向性を示している。

ルソーやバセドウに強い影響を与えたイギリスの啓蒙思想の第一人者ロックは「教育論」(1693)を書き、「健全な身体に宿る健全な精神」という理念のもとに、まず身体の問題を論じた。これは身体の健康の維持・増進を広い角度から論じたものであって、教育者の典型的な体育に関する考え方を示している。

近代学校体育の成立に、決定的な影響を与えたのは、他ならぬルソーである。

彼はエミールにおいて、人間形成に不可欠の手段として運動をとりあげ、教育の中にそれを正しく位置づけている。

この基本のもとに、体育という一つの領域を体系化したのがグーツムーツであった。

### 3. 文学者、芸術家の運動論

医学者や教育者と並んで、われわれは近世の人々に新しい生活感情を吹きこみ、人間の本性を示し、あるいは活発な運動を歌い新しい時代の開幕を告げた文学者や芸術家を忘れてはならない。

イタリア、ルネッサンスの芸術家は、生命にあふれた美しい人間の姿をわれわれの前に示した。

ドイツの文学者クlopシュトック(F. G. Klopstock, 1724-1803)もゲーテ(J. W. von Goethe, 1749-1832)も運動をたたえただけでなく自らも色々な運動に秀れた技能を有していた。

このように人間の本性に曇りのない目を注ぎ、身体の美しさを再発見するところから新しい体育の思想が生れてきたのである。